

新春所感



静岡県議会議員

須藤 秀忠

書を読み 古(いにしえ)に学ぶ



新年明けましておめでとう御座います。平成二十三年の年が皆様方にとりまして健康で豊かで和やかな年でありますよう心よりお祈り申しあげます。

富士宮市立図書館の一室に、私の尊敬する書家、故七澤象聲氏の刻字『讀書學古』という篇幅が架けられています。書を読み古(いにしえ)に学びと読みます。私はこの言葉が好きです。幕末の時代、徳川幕府唯一の大学である、昌平坂学問所を統括した儒者、今で言えば東京大学総長に匹敵する人である佐藤一斎は、著書『言志四録』の中の、一つ『言志後録』の中で、『孟子は、読書をするとは古人を尊び、昔の賢人を友とすることだと説き。道の上において、自分より一步も二歩先んじている敬服すべき友となると言っている。また、

経書(儒学の経典、四書五経など)を読むのは、敵しい先生や父兄の教えを聞くのと同じである。歴史書や諸子百家の本を読むのも、直接賢明な君主や賢い宰相、英雄、豪傑と交際するのと同じである。だから読書に際しては、心を清明にし、書中の人物より卓越した気概をもって相対しなければいけない。』と表しています。

また、佐藤一斎は、『書物を通して古人を友とし聖賢にまみえることは人生を大いに励まされることであり、『聖賢と語りつことにより水源のよくな活水が得られ』、小さなことにこだわらず、人間を越えた大いなる存在に自覚め、『論語』の『徳は狐ならず必ず隣あり』の言葉の如く、読書により人徳を磨くことにより周囲に人が集まるといふ、肚(はら)の座つ

た人づくりができることも言っています。

また、『言志四録』の中の『言志後録』では、『読書とは、自己との対話である』ともも言っています。『経書を読むは我が心を読むなり、読書は天の意図するところを探ることであり、読書は内省の時間であり、瞑想の時である。』と言っています。

この様な『書を読み古(いにしえ)に学ぶ』の言葉から、今、私が大切にしてる言葉がありまして。それは、私の尊敬する某先生から戴いた『孟子の言葉』『天が、まさにその人に天命を下さんとする時は、その人の精神、肉体をばるばるにするほど痛めつけるものだ。この試練、苦難に耐えることが出来なければ、天は天命を与えない』という内容の言葉です。高等学校、大学の七年間を夜

学で学び、通学電車を勉強部屋とし、その往復を読書の時間として過ごしてきた私にとり、読書の時は聖賢との楽しい語り合いのひとときであり、内省のひとときでありまして、故郷のためにこの命を捧げたいという志もすっかりと養ってきました。

『今年が天が私に天命を下す年になるかもしれない年であります。いかなる試練や苦難が待ち受けてようと、必ず乗り越えて、我が郷土を『住んでよし、訪れてよし』『生んでよし、育ててよし』『働いてよし、学んでよし』の『元気で活力があり、美しい町、豊かな町、思いやりのある優しい心』を大切にふる富国徳の理想郷ふじのくに』にしていきたいと思っ

ています。今年もよろしくお祈り申しあげます。